

第11回浜松国際ピアノコンクール開催記念
牛田智大ピアノ・リサイタル
オール・ショパン・プログラム

1部

ピアノ・ソナタ 第2番 変ロ短調「葬送」Op.35

ポロネーズ 第6番 変イ長調「英雄」Op.53

2部

幻想曲 ヘ短調 Op.49

バラード 第4番 ヘ短調 Op.52

舟歌 嬰ヘ長調 Op.60

春

2021
四季コンサート

2021年4月4日(日) 17:45開場 18:30開演
会場:アクトシティ浜松 中ホール
主催:浜松音楽友の会

プロフィール

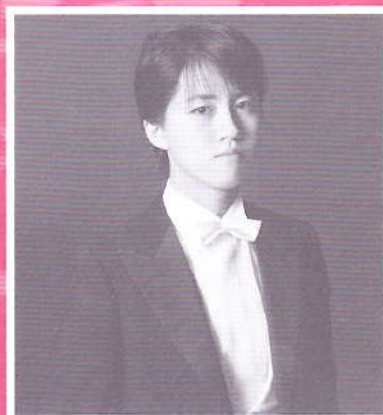
2018年に開催された第10回浜松国際ピアノコンクールにて第2位、併せてワルシャワ市長賞、聴衆賞を受賞。
2019年3月には出光音楽賞を受賞。

1999年福島県いわき市生まれ。父親の転勤に伴い生後すぐ上海に移りピアノを始める。2005年(5歳)、第2回上海市琴童幼兒鋼琴電視大賽年中の部第1位受賞。2008年～2012年(8歳～12歳)、ショパン国際ピアノコンクール in ASIA において5年連続第1位受賞。2012年(12歳)、第16回浜松国際ピアノアカデミー・コンクールにおいて最年少1位受賞。同年、クラシックの日本人ピアニストとして最年少(12歳)でユニバーサル・ミュージックよりCDデビュー。

「想い出」(2012年)、「献呈～リスト&ショパン名曲集」(2013年)、「トロイメライ～ロマンティック・ピアノ名曲集」(2014年)、「愛の喜び」(2015年/レコード芸術特選盤)、「展覧会の絵」(2016年/レコード芸術特選盤)と続き、2019年3月には最新CD「ショパン：バラード第1番、24の前奏曲」をリリース。

各地でのリサイタルに加え、シュテファン・ヴラダー指揮ウィーン室内管(2014年)、ミハイル・プレトニョフ指揮ロシア・ナショナル管(2015年/2018年)、小林研一郎指揮ハンガリー国立フィル(2016年)、ヤツェク・カスプシク指揮ワルシャワ国立フィル(2018年)各日本公演のソリストを務めている。

牛田智大
ピアノ・リサイタル



TOMOHARU USHIDA
PIANO RECITAL

●ピアノ・ソナタ 第2番 変ロ短調「葬送」Op.35

ショパンが作曲した3つのピアノ・ソナタ作品のひとつで、円熟期の傑作と言われている。作曲年である1893年は、ショパンがパリから離れ、フランス中部のノアンで恋人ジョルジュ・サンドとともに穏やかに過ごした年でもある。精神の平安のもとに、ショパンはソナタの常識を破る大胆な構想で創作に臨んだ。ショパンは、このソナタ作曲に先立って1837年に変ロ短調の〈葬送行進曲〉を作曲しており、ソナタの構想の段階から〈葬送行進曲〉を緩徐楽章に挿入することを前提にソナタ全体を組み立てたと考えられる。作品全体は変ロ短調、4楽章で構成される。

第1楽章 グラーヴェ、ドッピオ・モヴィメント 変ロ短調 2分の2拍子 ソナタ形式

低音のオクターヴで悲壮感を漂わせた4小節の序奏を経て、速度を上げた主部へ。第1主題では短いモチーフが断片的に続いたかと思うと、第2主題では一変してコラル風の温和な和音進行が変ニ長調で現れる。展開部では、転調を効果的に用いながら序奏のモチーフと第1主題を展開する。再現部では、よくある第1主題の再現をあえて行わず、堂々とした第2主題の再現が始まると、最後に加えられたコーダにおいて第1主題が第2主題と逆転した形で現れる。

第2楽章 スケルツォ 変ホ短調 4分の3拍子 3部形式

ソナタにスケルツォを採用する手法は、ショパンが尊敬したベートーヴェンの影響だろうと言われている。緊張感に満ちたオクターヴの連打は息つく間もなく終わり、それとは対比的に柔和なピウ・レントの中間部へと続く。静けさの中に淡々と3拍子を刻み続けるトリオがオクターヴで迫るスケルツォ主部を再び呼び出すと、次第にその切迫感を増し、最後は中間部の主題の一部をコーダとして蘇らせて消えるように静かに終わりへ向かう。

第3楽章 レント、マルシュ・フュネーブル 変ロ短調 4分の4拍子 3部形式

この作品の着想のもととなった〈葬送行進曲〉がここで現れる。沈痛な主部では、重い足取りを表すようなリズムが絶えず刻まれる。中間部で変ニ長調のトリオが深い悲しみの中に一縷の慰めをもたらしたかと思うと、まもなく再び主部が再現される。

第4楽章 プレスト 変ロ短調 2分の2拍子

両手のユニゾンによる3連符の連続がまるで即興のように全体を貫く。ここまでの計算された構造的展開の後にやってくるこの不可解な楽章は、聴く者に感情を整理させる間を与えないかのようなものである。楽章の最後にだけ現れる休符の存在が、この作品の終わりを強烈に印象づける。

●ポロネーズ 第6番 変イ長調「英雄」Op.53

ショパンはポロネーズ作品群を作曲家生涯を通して作曲し続けており、ポロネーズの創作の変遷を辿ればショパンの作曲の変化を理解できるほどに、ポロネーズはショパンを代表する作品ジャンルである。フランス語でポーランド舞曲の意味をもつポロネーズが、ショパンにとってポーランドの精神を反映させる作品としてとりわけ重要であったことは想像にかたくない。なかでも1842年に書かれた通称「英雄ポロネーズ」は、音楽の獨創性、高い技巧性、内的強靱さの表現と、円熟期ならではの高い完成度を感じさせる。全体は序奏とコーダをもつ3部形式で、16小節を単位とした起承転結を繰り返す手法をとっている。華々しい技巧と簡潔な旋律を理路整然とした構成が支える作風で強いドラマ性を生んでいる。

●幻想曲 ヘ短調 Op.49

ショパン唯一のピアノ独奏の幻想曲であり、恋人サンドと過ごしたノアンで1841年に作曲された。全体はソナタ風の形式のようにも思えるが、主題を次々に展開していく即興性と調性の絶妙な操作には自由な性格が備わっている。華麗なアルペジオと抒情的な旋律とを行き来する楽想には、ショパンが幻想曲という作品ジャンルに込めた思念が表れている。

●バラード 第4番 ヘ短調 Op.52

ショパンは1831年から42年のあいだに4曲のバラードを作曲したが、1842年作曲の第4番だけは他の3曲と異なる性格をもっている。ショパンのバラードに特徴的なのは、作品全体の物語性とそれを浮かび上がらせる明確な音楽構造である。しかし、この第4番は、混沌とした形式、変奏を繰り返してほかされていく主題、瞑想するように揺らぐ旋律と、まるで幻想曲のような魅力をもつ。そして、曲がクライマックスに近づくと、コーダの前で突如、時が止まったようなカデンツァが現れ、その静けさののちに音楽は坂を転がるように結末へと向かう。

●舟歌 嬰ヘ長調 Op.60

舟歌はヴェネツィアのゴンドラ乗りの歌に由来する作品ジャンルである。特定の形式はないが、8分の6拍子で、左手には舟が揺れる様子を表現する規則的な分散和音を配置するのが典型とされる。しかし、ショパンは拍子を8分の12拍子に設定し、息長く歌う旋律線を作り上げた。作曲年の1845年は、サンドとの関係が崩壊に向かっていた時期と重なる。甘美さと切なさが同居するその旋律は、晩年のショパンの追憶の念を歌っているようであり、色彩豊かな和音の繊細なうつろいに支えられている。

アンコール曲

ショパン／マズルカ ハ短調 Op.56-3